

---

# 短篇連作【さくら】

保地葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短篇連作【さくら】

### 【Nコード】

N7731B

### 【作者名】

保地葉

### 【あらすじ】

【さくら】をテーマにした短篇連作。再編集あり。

## 淡と濃

啓蟄を過ぎる前から雑貨屋には桜が並ぶ。

桜の色。桜の匂い。

無意識に顔をしかめ、ああ、わたしは桜が嫌いだったことに気付く。桜餅がディスプレイされていた。樹脂ゴムで作られた贋物の桜餅。こどもが口に入れようとし、母親に叱られている。

贋桜から離れ、小さな葉を買った。

革製で綾織りされている細い葉を水色の包装紙にくるんでもらう。彼女がピンクを好んでいるのは知っていたが、その色は選びたくなかった。

この町に春に桜は咲かない。緯度の関係か経度なのか、桜は初夏に咲く。この町で一番短い季節は春なのだ。夏は淡々と長く、移り変わりの早い秋のあとに眠るような冬が続く。

初夏の桜は周知の事実だが、桜にちなんだものが出回るのは春である。残雪のなか贋桜が並ぶ。開花の時期に桜餅は並ばない。

パティシエ見習いをしている彼女は、新しい桜の菓子を創るために秋から準備していた。桜の写真を眺め、塩漬けの桜の花葉を取り寄せ桜のアロマオイルで想像力を膨らませる。最近には桜に関する本を読んでいるらしく、誕生日の贈り物は葉に決めたのだ。

チーズスフレをスプーンに掬うと、葉缶がけたたましい笛を鳴らした。彼女が慌ててコンロを止め、大きなポットに湯を注いで行く。二人分には大きいように思うが、彼女はお茶やコーヒーの類いを驚くほど大量に飲む。ティーカップではなくビッグマグだし、一時期は何の影響かカフェオレボウルから直に飲んでいた。デミタスカップで濃いエスプレッソを好むわたしとは正反対だ。

彼女は淡い色を好み、わたしは濃い色しか選ばない。鬱気味の彼女は黒や濃いを身の回りに置かないようにと言われている。色によって触発されるらしい。明るい色、淡い色、と選ぶうちにピンクが多

くなっていた。わたしも彼女に会うときはマカロンブラウンなど暖色になるように気をつけている。しかし、淡い色合いの部屋でわたしは明らかに浮いていた。

真白なカップに紅茶が金色の輪を描いている。わたしはこうして、週に一度彼女を訪ねるのが習慣になっていた。彼女は試作の菓子を出し、他愛のない話をする。

出会った頃、彼女は時計に埋もれていた。わたしは今と変わらずこの町のタウン誌の記者で、小さな話題を追っていた。彼女は時計の、アンティークでもブランドもない極普通の時計に依存していて、しかし秒針の微かにずれたカチカチという音に追い詰められてもいた。青白い顔で時計に埋まりながらシフォンケーキを焼く彼女をわたしは小さな記事にした。それから彼女の回りは変わって行ったが、わたしは変わらず小さな話題を追っている。仕事の合間に彼女を訪れるという新しい習慣以外は。

チーズフレの隣りにフルーツタルトが並ぶ。彼女がフォークも使わずタルトを食べるために唇の周りについたタルトかす。

二杯目に注いだ紅茶は濃く、金色の輪を描いてはくれなかった。それで、わたしは彼女に贈り物を渡しそびれたことに気付いたのだ。

## 春うらら

臨時教員から常任講師、ようやく正教員になれたとき、私は三十路を間近に控えていた。

新人でもなく中堅で、そのうえ上役にあたる年代の集団定年を控え、いくつかの役付きになったのは言うまでもない。

しかし新任ではあるわけで、雑用と雑務のピンからキリまでこなさなければならず、私は毎日溜め息をつく日々を過ごしている。

数学教師のいいところは、新事実というか、歴史のように過去も現在も移り変わったりしないところだ。下調べに時間はかからない。新しい数式は日々証明発表されているが、中学という範囲では新しいことの導入はないといってよい。指導要領の改訂に気をつけていれば、授業に追われることは少なかった。

唯一の問題は、数学を苦手とすることも多いことで、これは永遠の課題のような気がする。コンピュータの普及で自力で計算することと疑問を持つこともが増えたことも事実だ。どんな難しい数値でも、コンピュータなら一発ではないか。そんな思いがありありとみえる。

そんな中、熱心に授業をきく生徒がいた。

春野うらら。

質問もしにくるし、授業で当てても嫌な顔せずに解く。中学レベルの数学に関してはむかうところ敵なしだった。どこから探して来るのか、難問ではなく奇問をよく訊きに来る。コーヒー豆の適切な挽き時間（薫りの飛散率と抽出温度の関係から求める）など、奇妙な問題ばかりを持ってきた。

その春野が一覧表を持ってきた。そして、これは何の数値でしょう、と私に訊いた。

一覧表は四月一か月の日付に3種類の数値がひとつき分続く。空欄があるが、それは土日であるらしい。数値はすべて連動しているよ

うだった。

それが何であるかわからないまま、連休が終わる。休み明けの怠惰な雰囲気の中の授業は眠気が充満し、何人かが顔を伏せたままだ。ふと、教室内の温度計が目に入る。∴℃。

あ。

春野と目が合う。にやり。私はあの数値の正体に気付く。

私は新しく五月の日付で表を書き、気温と人数を書き込んだ。桜は連休で散ってしまったので、少し考えて梅雨前線の位置を書いた。

放課後、教室の隅に掲示しようか。そんなことを考えていると少し気分が晴れて行く。ふと見ると遅咲きの桜が、こっそり裏庭に咲いていた。

春うらら。

## 淡と濃／raspberry濃

可愛い時計とバックを見つけた。

ベージュのベルトに文字盤はワインレッドに囲まれている。止め金は紺の腕時計。

正面の棚下段にある綿バックはワインレッドの生地にはベージュで模様がついている。

その日もその日でノースリーブの黒に黒のスキニー、濃紺のカーデイガンを着ていた。ビジネス、というよりトラベルバックはもちろん黒。かろうじてベルトはモスグリーン。

姿見に写すとバックとの相性は良さそうだ。彼女のところにいくのに、つい黒で固めていた私は、少しでも明るくするために時計とバックを買った。

待ち合わせの場所で彼女は眠っていた。

日傘をさし軽く俯いている。考え事をしているようにも見えるが、彼女はこれで寝ているのだ。

家で眠ることの出来ない彼女はこうして外で眠る。一日一時間ほど眠ればかろうじて生きてはいけるらしい。

向かいに座り眺める。白のスカートに白桃色のブラウス、淡い黄色のカーデイガン。目の前の紅茶は既に冷め、食べかけだろうラズベリーパイに添えられた溶けたバニラアイス。

ウェイターがメニューをそっと差し出す。彼女が眠っていることに対する気遣いか、メニューを指し示すと目線で頷き、会釈をして立ち去った。

彼女が目覚めたのは運ばれたアイスコーヒーの氷が鳴ったからだった。

日傘が揺れ、ゆっくりと首をもたげる。冷めた紅茶に口付け、カッ

プを空ける。片手を上げた彼女にウェイターが気付き、歩み寄って来る。熱い紅茶が追加される。

ラズベリーは眠くなるわ。

言い訳がましいことばにわたしは苦笑いを浮かべる。

ベリー系は好きなのだけど。

メロンとトマトも？

あら、トマトもベリーだったの？

新たに運ばれた紅茶に砂糖を落としたスプーンが回る。黄金の輪が浮かび、湯気がふつと揺らぐ。

ブラックのアイスコーヒーはグラス半分ほど残り、氷は半分ほど溶けている。ガムシロップとミルクで味を足す。

ストローで吸い込むと生温さと冷たさが一緒にやってくる。

トマトもベリーよ。

ふうん、知らなかった。でもトマトは苦手なの。

くるとストローを回す。小さな渦巻きが出来るが黄金色の輪はない。

そのバックと時計、お揃い？

うん。

なんだかトマトみたいな色ね。

そうね、

ラズベリーパイを口に運ぶ彼女を見つめ、わたしは胸に落ちた何かをコーヒーのせいにした。



## 淡と濃／raspberry淡

頭に霞がかかりいつも眠っているようだ。夢だろうと今だろうと区別はない。オーブンが生地を焼き上げる。砂糖の焦げる匂い、飴細工の蜘蛛の糸、空気を閉じ込めた生クリーム。極彩色と淡色の混じり合う甘い世界にわたしはいるのだから。

循環する閉鎖、繰り返す時間、秒針に追われ一心不乱にシフォンケーキを焼き続けたわたしを引き上げのは彼女だった。黒づくめの服を着、黒髪黒目自己主張の強いパーツ、可笑しなことに鞆も携帯電話も手帳も手帳に付けたペンまで黒、わたしは思わず言った。

黒は、引きづられるのよ。

彼女は暖かな色合いを身につけるようになった。モノトーン好きは譲れないのか色味が少ないのは否めない。わたしは触発されるように淡く色をたくさん身につけた。

ラスクの切れ端を貰い昼食にする。ポットからたっぷりのミルクティーを注ぐと一気に空けた。短く切りそろえた爪にラスクにまぶした砂糖粒が詰まる。舌先で嘗めとり二杯目のミルクティーを注ぐ。わたしはパスタも米も食べられない。醤油も味噌もケチャップも何もかもが駄目だ。果物に小麦粉にバターに牛乳に砂糖に。お菓子しかわたしは食べない。お菓子の形になれば何でも食べられる。和菓子もあげまんじゅうもラスクも。

夢のような世界、お菓子の家にいるような、誰もが羨む、わたしは生クリームを泡立て続ける。卵白を泡立て続ける。必要のない空気を閉じ込め続ける。そして夢を作る。

彼女はそんな世界を憎んでいた。

わたしは昼間少しだけ眠る。目が覚めると彼女がいた。どこで嗅ぎ

つけるのか、いつも不思議に思う。

ホットチョコレートとココアは何が違うのかしら。

カカオバターの含有量よ。

可笑しなほど彼女はお菓子について知っていた。口にできないくせに。わたしの前では食べるが、本当はお菓子が好きではない。わたしはそれを知っているし、彼女もわたしが気づいていることを知っている。

ラズベリーパイは如何？

ごめんなさい、昼食を食べてきたばかりなの。

こんな時間に、

ええ、仕事が押していて。あなたは遠慮せず食べて。ここのパイは軽くて美味しいそうよ。

そう、

わたしはラズベリーパイにバナラアイス、チョコレイトスフレを頼んだ。

運ばれてきたお菓子を見つめ、彼女はコーヒーを意味なくかき混ぜる。砂糖もミルクも減っていない。エスプレッソを追加し、残りのコーヒーを空けた。

フォークはラズベリーパイに優しく刺さり、舌尖に一緒にすくったバナラアイスが残る。彼女はわたしを見て小さく笑った。割ったスフレからチョコレートが溶け出す。

わたしの胸に落ちたのはチョコレートの香りだ。喉奥が冷えたのはバニラアイスの、口に残る酸っぱさはラズベリーのせいだ。そう思った。

## 淡と濃／gooseberry濃

姿見に映る自分の服装に、つい苦笑いを浮かべてしまった。

コーヒーメーカーが蒸気を吹き、香ばしい匂いが一際強く部屋に漂った。ショートタイプのコーヒーカップを取り出し、高い位置から注いだ。何滴か飛び散り、そこからもコーヒーの匂いがたつ。

甘すぎないチュニック風シャツは黒地に青で胸元と裾に小花が刺繍してある。開いた胸元からは見えてもいい、むしろ気温によつては脱いでしまうつもり濃青のタンクトップ、それに、細身のブラックジーンズを履いて裾を大きく折り返した。

コーヒーを胃に流し込むと目が覚める。きゅう、と縮んでから苦いものを出す胃をさすり、宥める。

パンの一枚でも食べようと思っていたが、やはりやめておこう。

ストックしている玄米クッキーを一枚、コーヒーで流し込む。もう一杯注ぎ、再び、鏡の中の自分を見る。

今日は彼女に会いに行けそうにない、な。

久しぶりの休日に行く予定の場所は少し遠いモールにある大型の書店だけだ。だけど、おそらくモールの中の店をいくつか覗くことになる。今から出掛ければ帰ってくるのは夕方、彼女に会いに行くに

は遅い。

無意識に理由付けした自分が馬鹿らしくなり、コーヒを一気に飲み干す。砂糖もミルクもない苦味と香ばしさの飲み物。

カップを頬にあてる。温かく気持ちいい。コーヒは体を冷やすというけれど、冷え性の私をこうして温めてもくれる。

綿飴のようにふわふわのフリルに真つ白なレース、金平糖を散らしたみたいな刺繍、ストロベリーキャンディみたいな唇が紡ぐ言葉はミルフィーユのよう。バタークリーム of 指先にジェリー・ビーンズを埋め込んだみたいな爪。べっこう飴の瞳が私を見ると、刻んだチヨコレートのまつげが瞬く。レモンティー色の髪は風に揺れ、砂糖の溶けた匂いが香る。

ごくり、と喉が鳴った。そんな自分が浅ましいと思った。コーヒを飲んだ。  
行かなければ。

カバンを手取る。愛用の黒の大きなトートバック、中身は財布と手帳、それくらいだ。画集を買うつもりだから。言い訳のよう。

玄関で靴を選ぶ。編み上げのサンダル、白のそれが目に入った。何度も足を通してない、ほぼ新品のそれ。

黒もあったのに買ってしまった白。

履き込み、見下ろす。少しだけ彼女に会いに行けるかもしれない、

と思った。あの喫茶店に彼女はきつという。

流れに任せよう。いつものように言い聞かせ、家を出た。

## 淡と濃／strawberry濃

エスプレッソ・メーカーが溜め息を吐き出した。瞬く間に良い薫りが広がり狭い店内を満たす。

カウンター席しかない奥に長い喫茶店の、唯一人の従業員であるマスターが背を向けたままカップに注いでいるエスプレッソ・コーヒー。

私の前にはプレーン・スコーン、ジャムもクリームもバターも添えられていない。できたてのスコーンはマスターが焼いたものだ。その隣にエスプレッソが並ぶ。

ありがとうございます。

いますか。

そうね。

何時ものやりとりでスコーンにストロベリー・アイスクリームとミルク・シャーベットをマール状に混ぜたものが添えられる。熱々のスコーンの上にひとすくいのとせると、直ぐに溶けてたらたら垂れてくる。赤と乳白色の混じる滴を嘗めとり、かじる。

舌に感じる冷たさの後の熱さと、上顎に触れる冷たいベリー、空気を含んだ濃厚なミルク、砕かれていくスコーンのかけら。私はそれをエスプレッソで飲み下す。

鼻を抜けていく香ばしい苦み。

たまらず、スコーンをもう一口かじる。唇の端から溶けた滴がこぼれだす。

拭おうとして、拭われた。その指先に付いた滴を無意識に嘗めとる。

焦らないで。

分かってる。

考えごと？

そう、ね。

彼女のこと。

そうよ。

微かに煙草の味がする指先が離れ、カップに半分は残る液体に触れた。琥珀色の指先がカップの縁を滑る。

きゅる、微かに鳴る。また浸し、指先が縁を滑る。

熱くないの。

熱いよ。

火傷してない？

確かめてみて。

きゅるきゅると鳴らしていた指先が私の唇に伸びる。私は逆らわず、その指先を含む。舌で触れる。苦い。

アイスクリームに浸せばいいのに。



指先は未だ唇をなぞり、マスターの目は私から離れない。

一度彼女を連れて来て。

だめ、ここは狭すぎるわ。そういうの、苦手なの。

オープン・テラスじゃなきゃ？

そうよ。

エスプレッソのカップを両手で包む。冷めかけの熱が気持ちよい。

ミルクティーを淹れようか。

…ないわ。

そんなことない。

ミルクティーは彼女の飲み物、私には…似合わないわ。

俯いた私の目元をマスターの親指がなぞり、視界が陰った。

ストロベリー・アイスクリームはマーブル状のまますっかり溶けてしまった。

そのキスは煙草の味がした。

## 開花

彼女が目覚めた夜、最後の蕾が花開いた。

既に葉桜の盛り、目を留める人もない。そんな中、彼女は息を吐いた。

ごぼぼ、と、無数の泡が空気を上って行く。吸う水が彼女の肺を満たした。

ゆら。月明りが射す闇がゆれた。

彼が闇を泳いで来る。しなやかな肢体。甘い薫りが彼の軌跡を漂う。彼女は誘われ、彼を追う。細い幹を蹴った躰が月明りを浴びて輝く。ふわり。躰にまとわる空気を払いながら、彼女は彼の跡を追って泳ぐ。

最後の蕾が小さく微笑み、彼女を見送った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7731b/>

---

短篇連作【さくら】

2010年10月12日06時45分発行